

## 浅井了意の仏書とその周辺（二）

——鼓吹物の変遷と怪異小説の素材源の変容——

和田 恭 幸

要 旨 仏書における了意の追隨者たちは、了意が収載を忌避した日本の説話・巷間説話を積極的にとり込んでいく。人生の最晩年を向かえた了意は、この新しい流行を無視することなく、それをも克服しようとした。その活動が仮名草子の怪異小説集『狗張子』に投影されることになった。



## はじめに

近世怪異小説の素材の一つに、唱導文化圏の説話がある。これを研究資料の点から直截に述べるならば、作品とは同時代に刊行された通俗仏書ということになる。

さて、ひと口に近世通俗仏書といっても、その数は多く、成立年、種類によつて様々異なつた相貌を呈する。近世後期に至ると、用途別の分化が進み、中には往来物に類した書物まで出現する。たとえば『観音経早読絵抄』（元文四年刊）がその好例で、<sup>①</sup>件の後印本には弘簡堂須磨勘兵衛の「幼童使用書目録」が付される。もはやそこには一点の仏書も見えず、「童訓往来新大成」をはじめ、みな往来物ばかりが連ねられる。

いまだ注釈書の通俗化に止まる近世前期とは、比べものにならない激変ぶりである。そして、通俗注釈全盛の、その一時期に限ってみても、内容は時々刻々と変化を見せる。なれば、そこと接点をもつ怪異小説にも、ただ単に一話ごとの依拠関係を超えて、件の変容ぶりが反映されてしかるべきではなからうか。

事実、浅井了意とその追随者としては、仏書の編集方針にある種の断層が認められるのである。かりに、了意がその動向を無視しなかったとするならば、同人作の晩年の仮名草子にも、ある種の影響が及んでいるはずである。

以下、迂遠ながらも鼓吹物の誕生から説きおこし、内容の変遷の具体を眺め渡して、怪異小説集『狗張子』に言を及ぼしていきたい。

## 一、通俗仏書の寛文中

思えば、商業出版の黎明期、すなわち寛永年中においては、いまだ禅籍や天台宗・浄土宗の古い注釈が趨勢を占める、いわば古典出版の時代と呼ぶに相応しい状況であった。以後もそれにさしたる変化は見られず、際立つた変調の兆しは、万治・寛文期を待たねばならなかった。

すなわち、万治・寛文期に至り、庶民階級を檀家の大勢とする浄土真宗に学事興隆の機運が興るのである。『本願寺派学事史』（前田慧雲著・明治三十四年刊）の記述を以てすれば「（寛文中に至って）浄土真宗一般に世間文運の勃興に伴ふて、各地に学事研究の者漸く輩出せし」時節の到来、となる。

そもそも、西本願寺に学林が創設されたのは寛永十六年のことであった。同年二月、江戸は築地妙延寺（本願寺派）の住職釈空誓<sup>(2)</sup>が、さる在家より「尼入道」の為にとの乞い受け、『本願取滴直談』一部十二巻を著す。ところが、これの刊行は跋年におくれること二十四年の遅延をきたし、漸く寛文三年、真宗の仏書屋丁子屋西村九郎右衛門の開版にして成る。

在家用の「直談」に流布の縁が開かれたこの年、くしくも西本願寺の学林では、一つの時代の終わりを告げる人事が起っていた。すなわち、初代能化西吟の没による知空・存空の代役就任である。近世仏教史に名を残す騒動の張本人西吟の没と、新たなる異議騒動「黒江の異計」の渦中に身を置くことになる存空の出仕。実に寛文中とは、単に学事興隆というだけでなく、本山の学林においてもある種の変革を向かえた時節にあったことになる。

そして、その五年後の寛文八年、書肆は同じ丁子屋西村から、世に「三部経鼓吹」と呼ばれる三部作の一つ『阿弥

陀經鼓吹」が刊行される。その作者こそ、仮名草子作家としての前歴をもつ大谷派の僧侶、浅井了意その人であった。ここに、近世通俗仏書に新たな一ページが開かれたといつてよい。それは、今日「鼓吹物」の総称を与えられる全<sup>(3)</sup>く新しい書名の注釈書の登場である。旧来、經典や聖教の注釈には、「私記」・「直談」等の書名を当てるのが常であった。「私記」の名は「流護摩私記」のごとく注釈というより修法次第をも想起させるが、浄土真宗においても慶長十年跋の『正信偈私記』など、他宗の旧に従う例が見られる。

これに対し、了意の用いる「鼓吹」の書名は、すくなくとも我が国の仏書においては先例を見出し難く、全く新しい書名の登場として理解される。以後、件の書名は、仏光寺派の玄貞、浄土宗の松誉・必夢といった追隨者を従え、元禄期に及んでいく。なお、玄貞は天和三年刊の「一枚起請文鼓吹」、松誉は貞享四年刊の『臨終要決鼓吹』、必夢は元禄五年刊の『往生講式鼓吹』を始発として、自らの著書に「鼓吹」を命名していくことになる。

## 二、「三部經鼓吹ノ序引」の典拠

ところで、いったい「鼓吹」の書名は、どの辺から選ばれたものなのか。実をいうと、当の浅井了意自身が、本邦初の新しい書名について、いささか題号釈を加える必要に迫られていた。それは、「三部經鼓吹」の総序にあたる「三部經鼓吹ノ序引」に、「客」と「予」(了意)との二者の問答形式で展開され、「客」はおびただしい量の故事を「予」に突きつける。以下、その本文を書き下し、便宜のため番号を振って抜粋・引用してみた。

本牒七十八巻にして已にして書成りぬ。名づけて「鼓吹」と曰ふ。是れ学識の耳を肥すに非らず。只、愚蒙の心<sup>いしやう</sup>に砒す。寔に倡導片言の補助と為んか。

客の曰く、「鼓吹」の名何の題する所ぞ。夫れ、①聾を会へて鼓するが如しとは、其の人に非らずして之れを告ぐれば聴かざる所以なり。②漸希漸大、声盡きて、方に一通其の鼓つこと三下に至るは衆を集むるの法なり。③誤りて進鼓を鳴らし、蜀兵潰ゆる者は晋の桓公が運なり。④元邵、義戦を拒む。退鼓を打ちて止む者は宋の魯秀がはかりごと権なり。⑤天鼓は即ち召神の術。⑥敗鼓は医家の貯へなり。又云ふ、⑦塊吹とは天籟なり。⑧横吹とは胡楽なり。⑨洞簫を吹き、兼箏を吹く。咸、騷人の感慨を興す。⑩詩の篇にも亦た云ふ、笙を吹き簧を鼓すと。⑪或し夫れ北狄の軍に鼓吹の楽有り、楚の威王に鼓吹の曲有り、⑫三都二京の賦を以て五經の鼓吹と名づくる者は孫綽なり。⑬禾田の鳴蛙賞して両部の鼓吹と為する者は孔珪なり。⑭捶刑の声を喜んで打肉の鼓吹と名くる者は唐の李匡なり。⑮黄鸝の啼くを聴ひて詩腸の鼓吹と為する者は宋の戴顒なり。若し將た別に擬有るか。」と。余、哂然とし曰く、「噫、子盍ぞ類証の繁きや。吾が腐才外に名を取ることを得ず。無量寿經に曰く『鼓法鼓、吹法螺』と。斯れ即ち法説の謂ひ。寧ろ是れならずとせんや。子が為に之れを言ふ。子が請を蔽ふに足れり。」と。

さて、右の典拠を探ると、『五車韻瑞』に登載される「鼓」・「吹」二文字の項の用例にたどり着く。つまり、件の一節は、辞書の用例を継ぎ合せて、問答形式に仕立て直した文章なのである。まず「鼓」の字は、『五車韻瑞』卷六十一に登載され、「鳴鼓」以下五十四の用例を挙げる。この内、「三部鼓吹ノ序引」に利用されるものを拾い挙げると次のとおりである。なお、用例の頭につけたへく付きの番号は、『五車韻瑞』に登載される順を示す。さらに、各用例の末尾に「↓」で「三部鼓吹ノ序引」との対応を示した。<sup>(4)</sup>

〔22〕会聾而鼓

〔家語〕非其人告之弗聴。(以下省略) ↓①

〔30〕誤鳴進鼓

〔晋書〕桓温伐蜀。蜀參軍戰沒。衆懼欲退。鼓吏——。蜀衆大潰。 ↓③

〔32〕打退鼓

〔又〕(↑直前の用例は宋史) 元邵自拒義軍。力戰將克。魯秀——乃止。↓④

〔40〕天鼓

〔抱朴〕(省略) 〔附類說〕學道須鳴——以召衆神。(以下省略) ↓⑤

〔47〕敗鼓

〔韓進學解〕——之皮。↓⑥

次は『五車韻瑞』卷六「吹」の用例からである。番号は先と同様であるが、〈冒頭〉としてあるのは、項目の一番最初に掲げられる音注に含まれた故事である由を示す。

〈冒頭〉

〔詩鹿鳴〕——笙鼓簧。(以下省略) ↓⑨

〔11〕横吹

〔後漢班超伝〕(省略) 〔注〕胡楽也。↓⑧

〔17〕大塊吹

〔李白〕天籟何參差。噫然——。↓⑦

⑩以下は、二文字合せた「鼓吹」自体の用例となるので、『五車韻瑞』を離れる。<sup>(5)</sup>「鼓」の部位においては、故事の配列順もほぼ『五車韻瑞』に等しく、「三部鼓吹ノ序引」との依拠關係を明瞭に示唆している。さらに、この手法は序跋に止まらず、本編の注釈にも摘要された。たとえば、筆者が旧稿「堪忍記の性格」(『近世文芸』55号)に引用する『阿弥陀經鼓吹』の「堪忍」の注も同様である。近年、件の「堪忍」の注に記される『百忍図』を『堪忍記』周辺の書籍として指摘する論考が発表されたが、『百忍図』の書名は『五車韻瑞』から故事と共に抜粋されたに過ぎず、『百忍図』自体が了意の机上に有り得たわけではないと筆者は考える。

さて、内容に立ち入ると、述べるところは極めて単純明瞭である。まず「客」の詰問は、仏書と關係のない「鼓吹」の語をなぜ書名に使用するのか、件の二文字の本義を述べて是非を問うもの。これに対する了意の応答は、肩透かしに近い仕方、大雑把に要を取れば「わたくし了意においては、そんな難しい謂われは知らず、ただ『大經』の二句に依っているだけですよ。」との意になる。

しかし、『無量寿經』の引用を見れば、了意のカラクリは、はらりと綻びを見せる。つまり、『無量寿經』の本文は「叩、法鼓、吹、法螺」と記されるのであって、了意が引用する「鼓、法鼓、吹、法螺」ではないのである。かりに『無量寿經』に準拠したとするなら「叩吹」になってしまう。さらに、当の『無量寿經鼓吹』に引用される『無量寿經』の本文は「叩、法鼓、吹、法螺」とあるから、了意の「序引」はすいぶんと無理をしているのである。

たしかに、「鼓吹」の語は、『法華經』においても求法、説法を表示する。だが、『無量寿經』中の二句の頭を取って「鼓吹」とはなりえない。とすれば、「鼓吹」の二文字は最初から「説法」ひいては「直談」の言い換えとして用意されていて、『無量寿經』の具体的な用例など、後から取って付けただけのもの、として理解されてくる。

つまり、はじめから外典に典拠を求めることの方に力点が置かれていたことになるのである。そこに示唆される事柄は、内典・外典の双方に典拠を有し、かつ新鮮で強い印象を与える書名を考案せんとする、プロの作家たる浅井了意の苦心であろう。これは「三部經鼓吹」のみならず、仏書である表示の「法林」と、世に知られる「樵談」の名とを合せる『法林樵談』の存在によっても証明されようかと思う。

ところで、「三部鼓吹の序引」にもう一つ注目を要する点が存在する。それは波線部の「類証」なる語であり、また「繁き」程に故事を引く理由である。そこに注目しつつ次節に移りたい。

### 三、片仮名本『因果物語』の撰取をめぐって

了意は、仏書の編集に際して日本の説話を拒絶した。これは、旧稿に述べる事柄ではあるが、後節の便宜のため、未報告の事例を以てここに記しておきたい。

さて、平仮名本『因果物語』の作者を浅井了意なりとする説がある。<sup>(7)</sup> 実をいうと、了意の仏書にも、その徴証と思しき一節がある。それは『無量寿経鼓吹』巻九—十「孤独獄之説」。一見、変った名称だが、指すところは今日観光名所ともなる所謂「地獄谷」であり、これに教理的位置付けを与えるために当てられた既成の仏教語である。比較的短い条なので、次にこれを引用したい。

三二ハ孤独地獄是レ閻浮人間ノ中、諸処ニ在リ。或ハ曠野山間、或ハ海畔中ニ在リテ、八万四千座アリ。苦報ハ転々軽シト云フ。寿モ亦不定ナリト因本経ノ説。本朝ニモ或ハ豆州ノ筈根山、或ハ奥州ノ外ノ浜、又ハ肥前国ノ雲山、又ハ肥後ノ国ノ安曾等、ミナ孤独地獄アリト云フ。

実は、右の波線部に類似する行文が、平仮名本『因果物語』巻三—十四「生ながら地獄に沈みし出家の事」に見られる(以下は大坂女子大学付属図書館蔵本。国文学研究資料館マイクロフィルムによる)。

三に孤独ぢごくとして、日本にては、はこね、あさま、うんせん、其外ひろ野、海辺、みなこれあり。

若干の相違は認められるものの、結びの「みなくあり」に至るまで近似しており、平仮名本『因果物語』を仏書ふうに増補・文体変更をすれば、ちょうど『無量寿経鼓吹』の記述になろうかと思われる。

一方、これに対応する平仮名本『因果物語』巻上—十三においては、ただ肥前と那須の「地獄」の説話を列ねるだけで、「孤独地獄」の四文字は一切記されていない。また、『無量寿経鼓吹』とほぼ同時代に刊行された同種の通俗仏書、すなわち『本願直談鈔』(正保四年刊)、『本願取滴直談』(寛文三年刊)、『仏説富樓那鈔』(寛文年中刊)と比較しても、「大経」第三願の地獄の注釈に「孤独地獄」を記す類例は全く見当たらないのである。

すると、肥前や箱根の地獄谷に「孤独地獄」なる既成名称を当てたのは、ほかならぬ了意の所為、となる。しかし、なぜか『無量寿経鼓吹』には「肥前の地獄」も「那須の教伝地獄」の説話も記されず、「ミナ孤独地獄アリト云フ」

という、いかにも思わせぶりの言葉で筆が止められる。同じ鼓吹物でも、その追隨者必夢の『七観音靈驗鼓吹』（元禄八年刊）に至ると、譬喩因縁談の地位を獲得して、二話全き形で収載される（巻一—六六—七）のに、である。

ここに、日本の説話を嚴格に忌避する、經典注釈における了意の姿勢がはっきりと明示される。また同時に、これは追隨者必夢との大いなる断層にも相当する事柄でもあった。

#### 四、『狗張子』の一話から

本節より、了意の仮名草子を視野に入れていきたい。怪異小説集『狗張子』（元禄五年刊）は、元禄四年の了意遷化を伝える遺稿出版であった。本書の典拠は、既に富士昭雄氏、江本裕氏によって明らかにされる<sup>(8)</sup>。そこに立ち現れる『狗張子』の特徴は、『本朝故事因縁集』『武者物語』『武者物語之抄』等を典拠とする、『伽婢子』の時点には見られない日本の説話の顕在化である。

作品全体の印象は、『伽婢子』よりはるかに精彩に乏しく、ネタ切れの感を禁じ得ない。そうした印象を与える元凶は、誰の目にも典拠がわかる、使い古された唱導材の援用と思しき数話が含まれるためであろう。次に、その顕著な例として、以下の三話を挙げたい。

##### （一）巻一—六 北条甚五郎出家

梗概 北条甚五郎が死去の後、地獄に墮ち、地獄めぐりをする。そこで、①母の獄苦、②生餌にした犬の怨み、④亡き人に再会し回向を依頼される（「しるし」に筈を貫う）等の諸事に遭遇し、④「大いなる穴に行が、り（中略）落つるとおぼえて」蘇生する。後に、廻国の修行者となった。

(2) 卷四—九 母に不孝の子狗となる事

梗概 虐待される老母に、隣家から恵まれた鯉のあつものを奪い、その現報で狗となった。

(3) 卷四—十 不孝の子雷にうたる

梗概 裕福な兄は老母の扶養を嫌がり、貧しい弟と十日づつ分けて養うことにした。ある時、弟方では遂に食事にこと欠き、老母はやむなく慥貪な兄の家へ行く。しかし、兄夫婦はこれを拒絶したため、落雷の現報を受けて死んだ。

さて、(1) は典型的な回獄蘇生譚であり、その類話は『伽婢子』にも見られる。しかし『伽婢子』巻四—「地獄を見て蘇」は、地獄巡りだけでなく、きわめて辛辣な批判精神を吐露するものであり、『狗張子』とは自ずと性格を異にする。すなわち、『狗張子』は有名な説話を継ぎ剥ぎするだけなのである。たとえば、右の梗概に①としたものは、絵解き文化圏にも及ぶ、かの目蓮救母説話およびその類話に拠ったものであろう。次の②は、『法苑珠林』・『太平広記』に記される遂安公の説話である。直接の依拠関係を除けば『冥報記』や、わが国の『今昔物語集』巻九をも挙げるができる。さらに、鼓吹物の分野では必夢の『七観音靈驗鼓吹』にも見られる。最後の④に至っては、もはや中国典拠を探る必要もなく、わが国の室町時代物語にも見られる類である。

しかし、②・③および④の筈を貫う話の、三要素を同時に合せ持つ説話となると「広異記」の「鄧成」(『太平広記』巻三八—に収められる)が、一番近い内容となる。また件の説話は、了意作の『法林樵談』巻一—九にも収載される。『法林樵談』は概ね『太平広記』を典拠とするので、本話も『太平広記』を出典とすべきである。つまり、『狗張子』の件の一話は、「鄧成」説話(『太平広記』)を直接の典拠として、各々有名な説話を再度縫合し直して書かれたもの、と考えることができるのである。

次に(2)は、富士氏のご指摘になる『本朝故事因縁集』巻五——四二を直接の典拠とし、またその類話に、同氏が合せてご指摘になる『鑑草』巻一——四がある。なお、了意の仏書中から筆者が検索し得たものは次のとおりである。

まず、「鯉のあつもの」は、了意作の『父母恩重経話談抄』巻三の「朱緒」の説話に近似の内容を見出すことができる(出典付を「勸善書にみゆ」とする)。すなわち、老母を虐待した上、病身となった老母の所望する「菰菜のあつもの」をも奪い取ったため、俄かに吐血して死ぬ現報を受ける、という内容。

食物という点では、同じく了意作の『善悪因果経直解』巻一「嘉靖時順天府民」云々の一条(『迪吉録』に拠る)も注目される。これは、病身の母のために「猪胃」を求めたが、妻はこれを与えず「産衣」を食べさせたため、口から蛇の尾が出て、これに打ち殺されるという現報譚。

また、「狗となる」点においては、同じく『善悪因果経直解』巻一に、盲目の母に犬の糞を喰わせた妻が「狗」となる説話(「賈耽為滑州節度使」云々)が収載されている。

(3)に至っては、話の筋より標題「不孝の子の雷にうたる」がこの種の説話の典型を示している。不孝と雷誅のモチーフはもはや枚挙にいとまなく、了意の著作だけでも『堪忍記』巻三、『無量寿経鼓吹』巻二十八——四等がある。また周辺の仏書では、『合類大因縁集』巻十一——三十、玄貞の『父母恩重経鼓吹』巻二——八など、多数の類例をみる。つまり、(1)——(3)は極めて有名な唱導材の使い回しにすぎず、精彩を欠く話の典型として理解される。また、この種の話の混入は、『狗張子』に『伽婢子』より一層濃厚、かつ安直な意味での唱導色を添加する結果をも招いたことになる。

さて、以上の例に類しながらも、少々性格を異にするとと思われる一話に目を転じたい。それは『狗張子』巻一——五

「島村蟹」の一話である。件の内容は「平家蟹」の説話として親しまれるもので、直接の典拠は『本朝故事因縁集』巻二―四十六を典拠とする(前掲、富士氏のご論考)。これを典拠と比較すると、先に見た例よりも安直で、典拠のまゝの写しに近い。僅かに、和歌一首を挿入するが、それとても『藻塩草』で「蟹」の項を引けば、すぐに得られる類である。

だが、本話にはもう一つ、位相を異にする付会がなされる。それは、本話最終の行文「化して異類となると、賈誼がこと葉空しからずや」の一文である。実をいうと、これは了意の鼓吹物にしばしば引用される行文でもある。たしかに、この行文とて、自らが知る知識をちよつと添えただけの安直な付会に過ぎぬ、との理解も可能ではある。

しかし、仏書における件の引用の位相および典拠を探ることによって、思わぬ問題が提示されるものである。

## 五、「賈誼がこと葉」の典拠

「賈誼がこと葉」を了意の仏書中に求めると『仏説十王経直談』巻二―二十五に行きあたる。また、件の一条は、その前後を伴つてある書物から丸取りされたものである。すなわち、巻二―二十「不信因果ノ弁」、二十一「儒流、地獄天堂ノ説ヲ破ス并答釈」、二十二「趙文昌死シテ周ノ武帝及ビ白起ヲ見テ蘇ル」、二十三「北周ノ庾信亀ト為テ苦ヲ受ク」、二十四「王荊公ガ子雱獄苦ヲ受ク」、二十五「梁ノ元帝眇目ノ事実」の五条である。

右の五条は旧稿に述べるごとく、和刻本仏書『帰元直指集』(寛永二十年和刻・村上平楽寺刊本)の第四十九条「地獄輪廻異類ノ説、儒典ニ出タリ」を典拠とする。便宜上、本稿にも件の内容を紹介しておきたい。

まず、冒頭から①趙文昌の廻獄蘇生、②庾信の墮地獄(九頭の亀となる)、③王荊公の息子の墮地獄(獄苦に苦しむ息

子の霊を見る）、④梁の武帝への託生（眇目の僧が託生して梁の武帝となる）、⑤范祖禹への託生（劉禹が託生して范祖禹となる）と、五つの説話が並べられる。これに続けて「蒙求、事文類聚等の書物を見ずや」とし、羊怙・鮑靚の故事および向靖の娘の故事を載せて「儒家の書、固とに輪廻の説有り」と、しめ括る。さらに、「隨書に李士謙が曰く、鯀化して能と為る」（原漢文）以下、「く化して」と為る」の記述を全部で十二例連ね、先と同様に「嗚呼、儒書に紀し載するは此くの如し。釈氏極めて此の説を為すに非らず。」としめくくり、さらに故事引用が続く。そして、その次のしめくくりにおいて、今問題とする「賈誼が曰く、化して異類と為る、亦た何ぞ患るに足らん」の文言が登場するのである。

『仏説十王經直談』は、故事説話の配列も『帰元直指集』と同じで、依拠関係は明白である。さらに、これを利用すること一度ならず、『善惡因果經直解』『孟蘭盆經疏新記直講』にもまた同一の記事が存在する。つまり、「賈誼がこと葉」を含む一連の儒仏論は、了意が最も特意としたネタの一つ、として理解する他はない。

しかし、了意が『帰元直指集』から継承したものは、話材だけではなかった。かの書から継承し得た第一は、故事説話を儒仏論のための「証」として引用する手法であった。たとえば、了意作の故事集『新語園』（天和二年刊）の自序では、倣うところの『語園』に対し「本牒二卷、皆出証を置く。寔とに是れ細鉤深きを釣るの謂か。」（原漢文）の賛辞をおくる。また、同じく自作の因縁集『法林樵談』の自序には、「夫れ、縣世新旧制作人夥し。章疏伝記の類、三教内外の書、編纂、積帙、或は約省虚乏、或は出証を置かず。殆ど道に聴ひて塗に説が如し。童蒙、ややもすれば惑ひ評かる。」（原漢文）と、既成仏書の問題点を摘出する。

右の二例が共に問題とするのは、「出証」である。これに類する「引証」の語の辞書的な意味をとれば、他の説を引いて自説の証拠とすること、となる。これを、『帰元直指集』に則して考えるならば、それは「嗚呼、儒書に紀し

載するは此くの如し」と結ぶことができるよう、権威ある出典名を付して故事説話を引用する行為、となる。

さらに、この範疇を超えて、説教の作法書『説法式要』（延宝四年刊）においても「倭書双紙の詞、証拠に引くに足らず。但し又、日本紀及び祖師の会釈は何ぞ捨つべき」（原漢字片仮名文）との指南がなされる。すると、二つの自序に述べる「出証」とは、故事説話を引用するだけでなく、極端にいうと、しかるべき出典名を明記する行為そのものを指し示すと換言できよう。

ここで、先に見た『無量寿経鼓吹』において、雲山・那須の教伝地獄を忌避した理由が明瞭になる。すなわち、それらは「倭書双紙」の世界で展開されるべき説話であって、「引証」たりえないからである。しかし、『狗張子』はその逆である。それらを「倭書双紙」の世界に封印するための理論的根拠が、逆に「倭書双紙」に混入・同居するに至ったのである。

「賈誼がこと葉」の典拠を知る今、〈中国の書物に記される説話〉と〈日本の巷間説話〉の対峙が、仏書の領域を超えて『狗張子』の問題として顕在化してきたのである。

## 六、必夢の鼓吹物とその前夜

了意仏書に見る厳格な忌避の姿勢は、追隨者たちによって無視されていった。旧来より經典注釈の領域では、天台宗の直談ですら日本の説話を引くのが常であり、むしろ了意の方が異質である。これは、草子作家に前歴をもつことによる一種の遠慮なのか、はたまたプロ作家ゆえの計算高い所行であったのか。推論の余地は幾通りか用意されている。しかし、その根本は、長く寺務の実際から離れることにより、ともすれば机上の蘊蓄に傾斜しがちな姿勢を、

当人の内に形成してしまったことに帰着するものである。

これに対し、若き日を諸大寺の順錫に暮し、田舎ながらも自坊と檀家を有する必夢においては、了意的姿勢を継承する必要は全くなかったと見てよい。必夢の鼓吹物こそが、片仮名本『因果物語』をはじめとする、民間唱導圈の色彩濃厚な説話群を多数収載する代表例なのであった。

しかし、必夢の著述は、因縁談だけでなく、その注に至るまで了意の仏書を利用する、完全な模倣追隨の作である。よって、自ずとそこに生じたものは、純粹な古き直談の継承発展である筈もなく、單純な新旧の混在であった。さらに、そうした必夢的〈新旧の混在〉も、必夢以前から少しづつ始められていたのである。

それが、必夢と同じ浄土宗の松誉の作『臨終要決鼓吹』（貞享四年刊）である。件の書の因縁談の多くは、『合類大因縁集』を直接の典拠としており、『臨終要決鼓吹』合類大因縁集』の形式で一覽にすると次のとおりになる。

卷一—十八 明祐律師ノ事↓卷六—一

卷一—十九 張鍾馗ノ臨終↓卷二—十八

卷一—廿九 刑王ノ夫人浄土ヲ見ル↓卷二—三

卷二—五 魏ノ世子ノ女浄業ヲ感ズ↓卷一—一

卷二—六 随ノ高浩象浄花ヲ感ズ↓卷一—二

卷二—七 并州ノ僧感ノ伝↓卷一—三

卷二—十三 老公宅ヲ造リテ死を知らザル事↓卷十一—十

卷二—十七 紹明法師臨終ノ惡相↓卷九—一

卷二—十八 澹之臨終ノ鬼↓卷九—二

卷二—卅六 阿弥陀魚ノ事↓卷二—五

卷二—卅七 雄俊往生ノ伝↓卷二—十九

卷三—十三 目蓮外道ノ為ニ殺サル↓卷十二—七

卷三—十九 宋ノ僧規冥途ヲ見ル↓卷九—四

卷三—廿七 白居易三尊ヲ図スルノ記ノ文↓卷四—十六

卷三—卅 張元寿弥陀像ヲ造リ父母ヲ救フ↓卷四—九

卷三—卅七 鶏頭摩寺ノ五通菩薩↓卷四—八

卷四—二 農夫死想ヲ覚ル↓卷十一—三

卷四—三 薄狗羅少苦↓卷三—卅六の五行目まで

- |       |                    |       |                     |
|-------|--------------------|-------|---------------------|
| 卷四—六  | 冤讎子ト為ル↓卷十一—廿六      | 卷四—七  | 漢ノ龐儉ガ事↓卷十一—廿四       |
| 卷四—八  | 四比丘苦ヲ語ル↓卷十一—廿三     | 卷四—十  | 漢ノ李夫人ノ事実↓卷十一—卅二     |
| 卷四—十一 | 檀林皇后不浄ヲ示ス↓卷十一—卅三   | 卷四—十七 | 世親菩薩内院往生↓卷四—十七      |
| 卷四—廿四 | 蓮華女得道↓卷一—十         | 卷四—廿六 | 仏比丘ニ対シテ無常ヲ問フ↓卷十一—廿一 |
| 卷四—卅三 | 一鬼五僧ヲ度ス↓卷一—十       | 卷五—四  | 夫死シテ婦ノ鼻中ノ虫ト為ル↓卷九—十八 |
| 卷五—十二 | 釈明詮ノ伝↓卷六—十六        | 卷五—十三 | 老嫗杵ヲ磨リ李白ノ学成ル↓卷六—十七  |
| 卷五—十四 | 孟訶ト子思ト問答↓卷六—十九     | 卷五—十六 | 鉄ヲ亡テ隣子ヲ疑フ↓卷十一—二     |
| 卷五—十七 | 李広堅石ヲ射ル↓卷十一—三      | 卷五—十八 | 迷覺ノ譬↓卷十一—八          |
| 卷五—廿六 | 高祖病ヲ治セシム↓卷十一—廿二    | 卷五—廿七 | 漢ノ武帝仙薬ヲ求ム↓卷十一—六     |
| 卷五—廿九 | 薄狗羅五死の縁↓卷三—卅六(後半部) | 卷五—卅  | 菩提樹火ニ焼ケズ↓卷七—卅三      |
| 卷六—十一 | 読誦ノ行者往生ス↓卷一—八      | 卷六—十二 | 明瞻法師ノ伝↓卷一—卅六        |
- さて、右一覽にみる大量な依拠関係は、『臨終要決鼓吹』にもまた、了意仏書の追随作としての位置付けを与える。こうした因縁談の中に、それらとは完全に異質な説話、すなわち卷二—廿三「妙西寺ノ縁起」が混入する。これは、うぶ女の説話に分類される内容で、一度葬儀をしたはずなのに成仏せず苦しむ女の幽霊を、曹洞宗の和尚が済度するというもの。一度葬儀をすませたはずなのに、という筋に明らかであるごとく、臆面もない我が宗尊し方式の、しかも他宗の檀家を離檀させんがための、いつてみれば田舎爺婆騙しの類である。こうした曹洞宗の布教の実態は、すでに堤邦彦氏が明らかにされるところであり、<sup>(10)</sup>注釈よりむしろ実地の布教、すなわち民間唱導團の説話としての相貌を浮き立たせる。

つまり、『臨終要訣鼓吹』は、日本の説話でしかも巷間説話と呼ぶに相応しい類を、了意的な世界に混入させていく、一種の時流を象徴的に語る資料と看做されるのであった。

そして、必夢の全盛期に入るといふ図式であるが、実のところ事情はそれ程に単純ではない。『地藏経鼓吹』（元禄十年刊）の跋文によれば、当初、作者必夢は収載すべき靈驗譚を先行書物に求めようと計画していたが、本屋からの提言を受け、急遽巷間説話を編入したのだという。<sup>(11)</sup> 跋文の記述は、要請を受けた事実のみに止まるが、周辺事情を勘案すれば、なるほど本屋の提言にも必然性が存する。

『地藏経鼓吹』の五年前に刊行される同人作の『往生講式鼓吹』は、注の部分に至るまで、了意仏書を利用する模倣作であった。<sup>(12)</sup> すると、了意仏書を利用しなければ注を付けられない彼が、全き追隨者として了意に続くためには、了意にできなかった地点を狙い打ちすることのほか手段はなかったろう。

幸いにも、必夢には親しく交遊する真摯な布教僧もあり、<sup>(13)</sup> さらには靈驗利生を願う田舎の檀家衆もあり、巷間説話を採るには、ちょうどよい環境に置かれていた。すると、当面の目的は必夢の仏書に更なる商品価値を付与せんがための商業戦術に有ったと理解されよう。

しかし、その商業戦術を思いつく背景には個人を超えた流行の変遷があったと見るべきである。その一つは、先に見た『臨終要訣鼓吹』のあり方。二つには、因縁集の領域<sup>(14)</sup>において、その名も『本朝故事因縁集』と題される、日本の説話の集成が元禄二年に刊行されていたことであつた。

つまり、件の本屋の提言は、当面の目的は何であつたにせよ、結果的に鼓吹物の変質に拍車をかけた張本人が本屋であることを語る、時代の証言にはかならないのである。そして、脱「了意」と呼ぶべき時流は一層の進展を見せ、『本朝故事因縁集』を経過する『勸化本朝故事新因縁集』に至って、ことさら当代の庶民生活圏の説話が目立つよう

になる。

## 七、再び『狗張子』の一話へ

さて、『狗張子』には使い古された唱導材の混入があった。これにより、はからずも安直な意味で『狗張子』に唱導との接点が生れてしまったのである。この唱導色の内に在りながら、「島村蟹」の一話は、到底安直とはいえない複雑な事情を示してくれた。

件の典拠『本朝故事因縁集』と浅井了意との出会いは彼の最晩年、その刊記を信用するならば、どんなに早く入手したとしても遷化の二年前のことと想定される。了意は、そこから抜き出した「島村蟹」の説話に、かつて彼の注釈書に「本朝」の「故事因縁」を忌避することを誓わせた最大の原因となる文言を付会した。

その行為にこそ、了意における、ある種の転換が示されよう。すなわち、以前忌避した類に対して、新たに位置付けを与え、積極的に取り込もうとする姿勢への転換である。それに至らしめた最大の原因は、彼の築き上げた鼓吹物の世界が、斯様に変化していくであろう時流を察知したことに求められるのではないか。なれば『本朝故事因縁集』に向けられる了意の執念も、必然的に理解されよう。それは、若き日、いくつかの典拠を得て、それを自由自在に改変して自らの地位を築き上げたその時のように、再びかの書物を利用することによって、時流を克服できるかな、はかなくも悲しい老人の幻想である。

『狗張子』の一話は、老いてもなお時流に逆らうことなく、それに着いて行こうとする了意最晩年の活動を如実に反映するものとして理解されようかと思う。そして、これを換言するならば、鼓吹物の変容が怪異小説に影響を及ぼ

したその一例とすることができる。

本稿は、筆者が昨年来パネラーとして発言をお許し頂いた、二つのシンポジウムの内容と重複します。すなわち、伝承文学研究会大会（平成八年八月開催。於大妻女子大学）における「シンポジウム勸進勧化の伝承世界」において「鼓吹物と近世怪異小説」の題で発表したものの、二つには説話文学会例会（平成九年九月開催。於新潟大学）において「シンポジウム近世の説話」のテーマのもと発表した「近世初期における通俗仏書と怪異小説——「狗張子」の一話から——」の内容であります。この好機に恵まれ、旧稿の粗漏を補訂できたばかりか、貴重なご教示を多く賜りましたことを茲に記し、両学会の御学恩に感謝申し上げます次第です。

#### 【補注および参考文献】

○ 引用文の漢字はすべて通行体に改め、不必要と判断したルビを省いた。また、句読点および（ ）に付す文言は便宜のため筆者が後補したものである。

① その見返しには、次の宣伝文句が連ねられ、「御経をはやくおぼへ」るための書物の由である。「此書は観音経を子達、女中様方にても読安く本文にかなをつけ、両読とし絵図、平かなにて委しく分りやく、いろは番付をもつて講釈を加へ、誠に御経の靈驗あらたなる事、諸人童女に至る迄しらしめ、又は遠国へんびにても師匠なくして御経をはやくおぼへ、御利益を蒙らしめんがため、板行となし世にひろむるものなり。」

② 空誓は、江戸築地妙延寺の住職。もと本願寺の江戸別院（現在の築地本願寺）の輪番。「本願寺通記」には、関東一の博学の者としての賛辞が記される。拙稿「浅井了意の仏書」（国書刊行会「叢書江戸文庫」月報29。平成五年刊）にも聊か記す。

③ 富士昭雄氏「仏教説話の終焉」（日本の説話）五に所収。昭和五十年、東京美術刊。

④ 西尾市岩瀬文庫所蔵の和刻本（万治二年八尾勘兵衛刊本。国文学研究資料館にはこれのマイクロフィルム・紙焼写真を取める。）による。なお、引用にあたっては、送り仮名をすべて省略した。

⑤ ①以下は、未だ典拠を調査中である。

- (6) 拙稿「咄之本の素材―奇異雑談の世界―」(『講座日本の伝承文学』巻四所収。平成八年、三弥井書店刊。)
- (7) 坂巻幸太氏『浅井了意 怪異小説の研究』(新典社研究叢書35。平成二年刊)
- (8) 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」(『国語と国文学』昭和四十六年十月特集号。)。江本裕氏「了意怪異談の素材と方法」(『近世文芸 研究と評論』第二号)
- (9) 拙稿「『伽婢子』考―序文釈義」(『見えない世界の文学誌』所収。平成六年、ペリかん社刊。)
- (10) 伝承文学研究会大会のシンポジウムにおける同氏の御発表による(平成八年八月開催)。この内容は、近く同会の発行の『伝承文学研究』(平成十年発行予定)に掲載される予定である。なお、同氏の御論考に「洞門禅僧と神霊済度説話―若狭・向陽寺の縁起を中心に―」(『伝承文学研究』四一号、平成五年刊。)がある。
- (11) (13) 渡浩一氏「地蔵説話集としての本書の性格」(影印本『延命地藏菩薩経直談鈔』大島建彦序・渡浩一編。昭和六十年、勉誠社刊)
- (12) 拙稿「当館所蔵必夢の仏書三種并にその特色」(『調査研究報告』十六号。平成七年刊。)
- (14) 「因縁集」とは説教用の説話集の一般名称であると思われる。版本では『合類大因縁集』の内題で知られる『説法因縁集』の存在もあるが、説教師の抜き書きノートに類する写本は概ね「因縁集」と題されるものである。釈道幸蔵本『因縁集』(平成八年、勉誠社刊)の『説話と伝承と略縁起』に筆者が翻刻する。、大正大学本『因縁集』などがそれに当たる。また古典文庫に収められる名古屋大学小林文庫本『因縁集』もその一種かと思われる。近年、件の小林文庫本『因縁集』を以てある版本の近世小説の典拠とする論も行なわれるが、現在のところ件の書に書写普及の形跡は見られず、斯様な個人用の一写本を以て典拠するのはあまりに性急で、むしろ小林文庫本『因縁集』が取材した版本をもつて典拠と為すべきであろうかと、私は思う。